

ティー

ネット

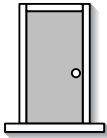
T・NET通信

2002 AUTUMN

No. 22

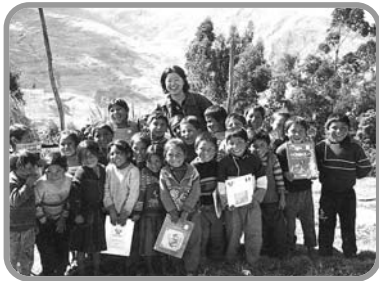
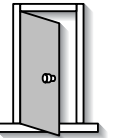
発行

財団法人 日本ユニセフ協会 学校事業部
 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス TEL 03-5789-2014 FAX 03-5789-2034
 ホームページ: <http://www.unicef.or.jp> 募金口座 郵便振替・00190-5-31000 (財)日本ユニセフ協会



Opening Doors Project

「ドアを開こう」プロジェクト



青木さんと子どもたち

©UNICEF/Peru

南米ペルーでは、6歳から11歳の子どものうち約25万人が学校に通っておらず、その多くはアンデス地域およびアマゾン地域に住んでいる子どもたちです。また、小学校を卒業した子どもの割合はペルー全体では60%ですが、アンデス地域およびアマゾン地域では30%に低下します。教育の質にも問題があり、年間1,000時間の授業を行うように定められているにもかかわらず、都市部の学校では500時間、農村部では250時間しか授業がないところがあります。全ての子どもたちが質の高い教育を受けることができるように、ユニセフは教育省と協力しながら支援活動に取り組んでいます。ユニセフ・ペルー事務所の教育担当官 青木佐代子さんが、その支援活動の様子をご報告下さいました。

ユニセフ・ペルーの教育プログラムには、「ドアを開こう」という名前の教育プロジェクトがあり、1999年10月から4年間の予定で始まりました。「ドアを開こう」プロジェクトは、特に農村地帯の女子教育を促進するための、教育への多角的アプローチ・プロジェクトです。基本コンセプトは、地方自治体やコミュニティが子どもの教育に責任を持つというものです。

初等教育の成果を上げるためには、学校やトイレを作るだけでは不十分です。まずペルーの文化的・民族的・地理的多様性を理解することが大切です。ペルーの場合、公用語であるスペイン語による教育のみでなく、先住民言語を含むバイリンガル教育が必要とされています。例えば、ケチュア語が母国語の子どもには、スペイン語とケチュア語の両方で話しかけることにより、子どもたちも勉強を深めることができます。ユニセフは、言語と文化に配慮したカリキュラムを組んでいます。

また、子どもを取り巻く環境全体を、子どもが学習できる環境へと改善していくことも必要です。先生のための研修や教材の充実は勿論、就学前の子どもを対象に小学校入学の準備を行う必要がありますし、子どもの教育に対する親の理解と協力、そしてコミュニティの参加も不可欠です。特にコミュニティは、学校に通っていない子ども（多くの場合女の子）の多い場所を調査し、その結果を地図に書き込む役割を担っています。そしてその地図をもとに、就学率の低い地域で親や子どもと一緒にユニセフは彼らの言語で教材を開発し、教育への関心を深めてもらいます。

それから、出生届のない子どもたち。就学率がたとえ60%でも、それは出生届を持ち、公に存在が認められている子どもたちの60%であって、出生届を持たない子どもたちについてはまったく情報がなく、実際の子どもの数は分からないのが現実です。なぜ出生届を持たない子どもがそんな

にたくさんいるのでしょうか。それは、書類を作る役人がいる村まで行くためにお金がかかること、行ったとしても、役人の知識や経験不足のために書類に不備があると正式な書類として認められないこと。そして、生後満一歳を迎える前に死亡する乳児死亡率が高いことから、生きるか死ぬか分からない我が子の出生届のために貴重な現金を費やせない、といった背景があります。しかし、出生届がなければ、市民として存在することにはならず、予防接種や学校入学といった様々な公的サービスを受けることができません。



教室の様子

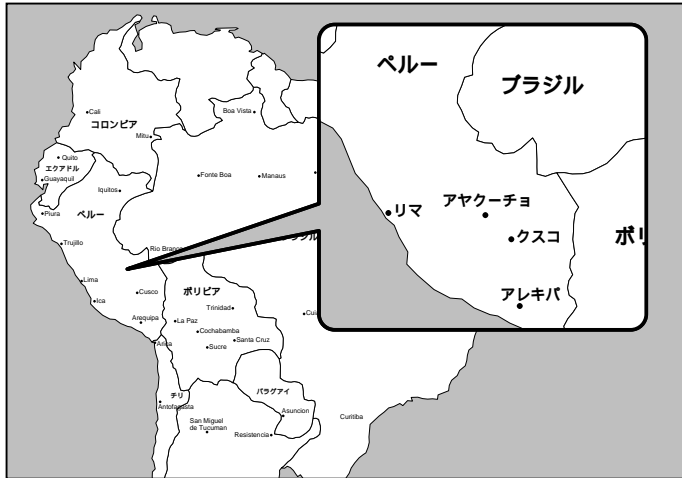
©UNICEF/Peru

ユニセフはそんな現状を少しでも改善するべく、ペルー政府と協力して日々奮闘しています。情報や先端技術からほとんど隔離され、同じペルー国民たちからも忘れ去られた子どもたちの人間らしく幸せに生きる権利を守るために、教育省や保健省などの中央政府、地方政府を支援することを中心に、現地のコミュニティ、警察、教会、そしてNGOと微妙な調整をしながら子どもたちの明日を今日より良くしようとしています。根気の要る地道な努力ですが、少しずつ地元の人びとが自分たちの力で動き出そうとしています。そんな試みを応援し、日々課題を提示しながら、ゆっくり、しかし確実にユニセフは「継続可能な援助」を続けています。

ペルー 基礎データ

面積：128万5,215平方キロ（日本の約3.4倍）
 人口：2,566万人（2000年）
 首都：リマ
 言語：スペイン語、ケチュア語、アイマラ語など13言語
 1歳未満児の死亡率：40（2000年）出生1,000人あたりの死亡数
 成人の識字率：男95% 女85%（2000年）

「ドアを開こう」プロジェクト実施地域 「ルンクーア」への視察



「ドアを開こう」プロジェクトの実施地域は、中央アンデスのチャンカという地域で、町の名前はアヤクーチョ。また、2001年からは、アマゾン地域にも広げ始めています。なぜこの地域が選ばれたのか。

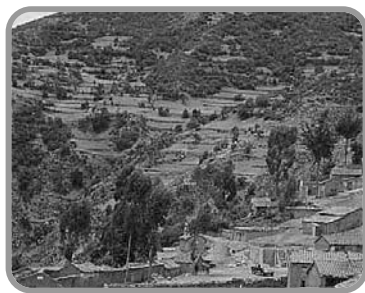


アンデス地域 ©UNICEF/Peru

理由1：中央アンデスは伝統的な生活様式や考え方が色濃く反映されている地域で、男の子が優先され、女の子の教育がなされないこと。

理由2：チャンカは、80年代から93年にリーダーが逮捕されるまで、毛沢東主義テロ集団センデロ・ルミノソが暗躍した地域であり、インフラが破壊されたが、その間安全性への配慮から、開発プロジェクトから取り残されたこと。また、テロの影響で、多くの住民がリマなどの大都会へ「避難」したため、地域が「過疎化」し、まだテロの傷跡が深く残っていること。

理由3：もともと非常に貧しい地域であること。



ルンクーア ©UNICEF/Peru

「ドアを開こう」プロジェクトの状況を把握するため、その現場を視察に行くことに。まず、リマからアヤクーチョという町まで飛行機で約1時間。そこからテロ集団センデロ・ルミノソに占領された町を抜け、彼等に虐殺され絶滅した村々を通り、爆弾で破壊された橋を横目に、舗装されていない山道に行くこと7時間。夕方の5時ごろ、やっとのことでコミュニティに着いたら、私たちは埃まみれ。しかも、道中間かされたカーラジオの「パシージョ」という音楽のせいで頭の中が、水アメの中のあんず状態。しかし、早速村人たちが集まってくれ、男女ペアのユニセフの「プロモーター」の指揮のもとに、彼等のコミュニティについて話し合う。

ルンクーアの抱えている最大の問題は貧困。貧しいため子どもは重要な働き手となっており、放牧や農作業の手伝い、幼い兄弟の世話、洗濯や料理などの家事を子どもたちがこなす。また、「女の子は学校に行かなくてもいい」という考え方が地域に根ざしているため、男の子は学校に通えても、女の子は家事などの手伝いをしていることが多い。親にも教育の重要性を認識してもらえるように、地域で会合を開いて教育への理解を深めてもらう必要のあることを確認する。

全く電気がないところに行ったのはとても久しぶり。暗くなったら何も見えず、足元も見えないし隣にいる人の顔も見えない。風がざわざわ言っていて、木の影が見えるだけ。村があるのに、見渡す限り光が一つも見えないというのは、なかなかの景観です。台所を借りて、持ってきた夕飯を温めてもらって食べ、村人の家の屋根裏にたくさん羊の皮を敷いてもらって眠る。これがなかなか快適。外から来た人は皆一緒に雑魚寝。



©UNICEF/Peru

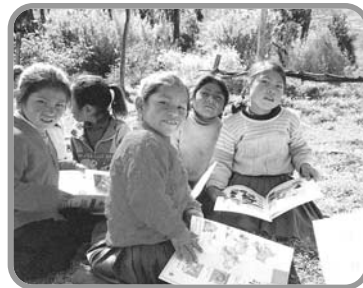
翌日は学校見学。全体で60人くらいの学校で、男の子と女の子が半々くらい。非常に活き活きした子どもたちで、3人の先生たちも子どもと仲良くやっていた。土をこねている子どもの袖をまくってやったり、お話を作る教材の取り合いをする3-4年生をなだめたり、5-6年生の劇に爆

笑したりしていた。しかし、教育省から何年かに一度支給される教科書は、今年になるまでルンクーアの人びとが話すケチュア語ではなく、スペイン語だったとのこと。ペルーのバイリンガル教育は必要数の30%ほどしかカバーされておらず、子どもたちにはわからない言葉で授業が行われている地域の方が多い。



©UNICEF/Peru

帰りも7時間かと思いきや、ビルカスワマンという中間地点に着いたところで、「今日はストライキなり」。道が封鎖されていて、飛行場とぬるま湯が出るシャワーのある町に辿りつけない。でも、もうお昼の時間だから終わるんじゃないの、雨も降りそうだし。南米のストライキは、お昼休み2時間、週休2日、雨が降ったら解散、サッカーの試合がある時はやらないことが多いのに....。仕方がないのでのんびりお昼を食べ、インカ時代のピラミッドを見学する。それでもまだストは終わらない。寄ってきた子どもたちとお喋りし、匂って来た焼き立てのパンに辿りつき、その辺をぐるぐる回ってみる。堪忍袋の緒も切れるかという直前、何とか道が開通。途中1度タイヤがパンクして、30分ほど休止したものの、結局10時間かかって真夜中近くになって、何とか無事にアヤクーチョに辿りつく。



©UNICEF/Peru

仕事のあまりの忙しさに倒れるのではないかと考えることもありますが、温かい人びとに囲まれて、良い仕事をしたいと強く思います。ペルーでの勤務の間に小さな種をまき、いつかそれが大きな木になって、そしていつの日にか、その枝や木陰が、人びとの活力と笑顔の元になるようにと願っています。

ユニセフ・ペルー事務所 青木佐代子さん プロフィール

ボストン大学大学院で教育修士号取得。専攻は国際開発教育。大学院卒業後、ボストンのNGO、オックスファム・アメリカのアジアプログラムで働く。その後エクアドル政府の職業訓練所で一年間、英語教師を勤める。2001年1月よりユニセフ・ペルー事務所に2年間の予定で勤務。